Okai, Shingo
Kokugogaku Kango to
kokugo

岡井慎吾

国語学

漢語と国語

國語科學講座

—Ⅲ—

國語學

漢語と國語

岡井愼吾

株式會社

明治書院

國語科學講座

— IV —

國語學

漢語と國語

岡井愼吾

株式會社
明治書院

目次

漢語と國語

岡井愼吾

緒言

私は昭和六年十月に全國中繼で「漢語に就いて」を放送した。その時は、漢語の國語に喰入つた狀況や、漢語が二字から成る理由や（漢字の研究「支那語の特質と漢字」の條にも略述）、漢語の熟語の種類別や、その解釋について古來誤られて居るものやを演べたが、機會が有つたら國語に影響した點をも列擧したいなどゝ思つて若干腹案もこしらへた。

さて本講座に於てこの題目は東北大學の山田教授が筆を執られると聞いた時、私は斯界第一の人、定めて精到な御研究が有らうと多大なる興味を以てその御發表を待つた。

然るに三月の末に至りて山田教授は雜誌改造に「漢文漢語の影響によりて生じたる國語の諸相」の御發表があり、本題の御執筆は自然それと重複し易いとの理由で御斷りになつたとて私に代りて執筆せよとの事である。いかに狗尾續ぐと申すとて山田教授の代りに私とは餘りの換へ劣りだから私も唯躊躇するばかり、取り敢へず改造の山田教授の論文を一讀すると、發端に言海の和語、漢語の數の統計を引用して、遂に國語の半數は漢語の形を取つて居ると斷ぜら

れたあたりは私の放送と符合する所だが、その他は教授獨得の明敏な着眼と精深な研究とで私などのかけても及ぶ所では無い。たゞ漢文の方から見る點には或は愚者の一得と云ふべきが無きにしも非ずのやうにもあつた。その間是非に是非にと責められるので遂に之に當ることにした。歐陽修の詩に『失レ杯出レ畫レ足、傷レ手因レ代レ匠』とある。手を傷つくるは自業自得ともあきらめやうが、蛇足をのみ書いては定めて讀者諸君の御迷惑だらう。

總　説

一　國語と漢語との關係

本講座の各項目は讀切りの分冊とは爲るものの、この「漢語と國語」は新村先生の「國語系統論」に先導せられる「國語學」の一項である。然るに國語と漢語との間に言語の系統としては連絡が無いとせられる以上、その取扱ふべき點は兩者の關係に止まらう。

兩者の關係を狹く見れば同じき事項に對して表れる兩者の異同だらう。今その例を擧げれば極めて普通なものに止めても猶左の七つの場合がある。

一　國語と漢語とは反對の排列になるも多い。

（イ）ツキヒ　日月　シヤウネ　根性コンジヤウ　わが造語かも知らぬ

ミギ　ヒダリ　左右　ウマクルマ　車馬

ニシ　ヒガシ　東西　メヲト　夫婦

ヨル　ヒル　　晝夜　　アメ　カゼ　　風雨

（ロ）月見　花見　　觀月　看花　　筆使ひ　　運筆

年嵩　　高齢　　家出　　出家　　辭家

牛合せ　　鬪牛　　病み出す　　發病

（ハ）書見　　讀書　看書　　着到　　到着

客來　　來客

二　漢字又は漢語の讀方にて、彼にて區別せぬを此方にて分てる。

南斗（シユ）北斗（ト）　斗の字南北に從つて音異なり（下學集）

漢土にてシユの音は料の略字。

大車（キヨ）無レ輗小車（シヤ）無レ軏

漢土にて車の古音キヨ今音シヤなりと云ふ。それによりて大小を讀み別く。

晉（シン）　坤（コン）　性（セイ）　淸（シヤウ）　詞（シ）

秦（シン）　艮（ゴン）　情（ジヤウ）　淨（ジヤウ）　辭（シ）

は每に同じき場合に表れて混雜し易きを防ぐ爲とも云ふべけれど

十（ジフ）　麥（バク）　母（ボ）　鼠（ソ）　句（ク）

拾（シフ）　脈（ミヤク）　牡（ボウ）　暑（シヨ）　溝（コウ）

の類は混雜し易きを防ぐためとばかりも云ひ難いでは無いか。

三　漢字にて義の異なる爲に音も異なる時、吾が國にて相應ずる音を用ひぬものがある。

質　唐韻、陟利の切　チ　左傳に周鄭交々質す

　　唐韻、之日の切　シツ　性質　質問

國語の人質（ヒトジチ）といふのは之と合はない。

帥　唐韻、所類の切　スヰ　將帥

　　唐韻、所律の切　シユツ　長子、師を帥ゐる

國語にて太宰權帥（ソチ）といふはシユツの類音なるが、名詞の時はスヰの音たるべきだ。

四　同一のことを表す語の音が國と漢土とにて異なるもの、

	吾が國	漢土
亞米利加合衆國	米國	美國
佛蘭西國	佛國	法國
獨逸國	獨國	德國
	汽車	火車
	自動車	汽車
	居留地	租界

五　同一の語にて吾が國と漢土とにて義を異にするものがある。

鮨　スシ

漢土にては「肉の䏣醬なり」と解して吾が國でいふ醢(シホカラ)のたぐひだから、吾が散しズシ・押しズシ・卷ズシ・握りズシのスシとはその物質が大いに違ふ。吾がスシには寧ろ酢（鹽米を以て之を醸すこと菹(スヅケ)の如く熟して之を食ふ）の方が當る。

賄　マカナヒ

漢土にては「財帛の總名」とし「贈送」とするのみで飲食の意は毫も存せぬ。吾が國では贈送の意が轉じて「供給する」ことゝなり、遂に飲食を供給する方に主として用ひる。曾て支那人が日本の學校を參觀していはゆる賄室に至るやその支那人はコンミッシコンを授受する室と考へてその準備に取り掛つたといふも作り話ではあるまい。

挨拶　アイサツ

漢土にては挨は推ス、拶は逼ルで、鶴林問道篇に士庶挨拶とあるも士庶が押し合ひへし合ふ様なり。之より轉じて碧巖錄に「一挨一拶其の深淺を見んことを要す」とある用法となりても師の魂と弟子の魂とが推しつ推されつして悟道の深淺を見るの意であつた。この故に吾が國の答禮・報酬などの意とは猶違い。

六　漢語より來たものだが、その意を表すのに全語を用ひぬものがある。

莫大　莫大焉にて「コレヨリ大ナルハ莫シ」だから非常に大なることゝなる。

身莫　法華經に身莫犯とありて「身、犯スコト莫シ」だから謹愼深き意となる。愼莫などゝ當てゝは愼むにや愼まぬにや。

滅法　滅法界なれば「法外ニ、甚シク」の意となる。

蜑　アマ

蜑には南方蠻族といふ解あるのみだ。わが國にいふ海人を烏蜑戸といふこと明の陶宗儀の輟耕係に見えるから、この蜑は烏蜑戸の三字を蜑の一字に約したもの。愈〻出でゝ愈〻箭なりだ。

七　意義相通ずる兩字ある時、吾が國にて乙（後出）の音を甲（前出）の音としたものがある。

東宮（トウ）
春宮（シュン）

東宮は御座所を申し、春宮は宮舍を申したのだと職原抄述解にあるが、春宮をもトウグウと讀む。

斛（コク）　儀禮、聘禮記に「十斗」を斛と曰ふ。
石（セキ）　說苑、辨物に「十斗」を一石とす。

吾が國では十斗を示す石をもコクと讀む。

立（リフ）
竪（シュ）　廣雅釋詁に「竪は立なり」

吾が國にては竪（リツ）儀、（法會の時、論場にて探題の出した論題につきて義を立つること）竪（リツ）者（釋家官班記に二十藕

を經た者の稱）の語ありて竪を立に讀む。

匜　儀禮に「槃匜は盥器なり」。倭名抄に匜波邇佐布（ハニサフ）

半插　倭名抄に「波邇佐布の義、或る說に云ふ柄有りて半はその內に插まれ、半はその外に在るが故に呼びて半插と爲すなり」

　卽ち匜に直に半插の者を附す。

笊（ザル）

笊籬（サウリ）　齊民要術に「湯煮ゆれば笊籬にて漉ひ出す」とあれば今のザルと用途同じ。

　卽ちザルは笊籬の音より出でたるもの。

匙（サジ）　說文に「匕なり、匕は用ひて飯を比取する所以」

茶匙（サシ）

　卽ち匙は必ず茶に用ふるには非ぬに。

但し以上に止めては餘りに狹隘に過ぐる嫌がある。それは漢語といふ語に對する概念にも關係するから先、それから定めてかゝらう。

二　漢語の範圍に關する兩說

吾人が思想感情を發表する爲に用ひる言語の總てを國語といふに異存はあるまい。この國語を成立から見れば純粹

なる吾が國の語即ち和語と漢語と外來語とに三分せられよう。現今用ひらるゝ國語といふ語にはこの和語を指すこともあつて一の國語が兩樣の意義をもつ。それは姑く措いて漢語といふが外來語の埒外に立つて儼然たるのででも、いかにその勢力の大なるかゞ分る。さて言海で見ると和語二一・八一七、漢語一三・五四六、和漢熟語一・七二四とある如く、和漢相熟して成つた語が和語漢語の合計の千分の七十四を占めて居る。これ等を漢語に屬せしめるか否かは學者によりて意見が違ふ　橋本教授は日本文學大辭典「漢語」の條で

漢字音の語が純粹の日本語と合して複合語を作つたものも漢語とは云はない。例へば敷地・身分・小僧の類

と云はれたが、山田教授は

現今わが國語の中の漢語といふものは先づ漢字の音を用ゐていふ語といふやうに考へるより外はあるまいと思はるゝ。何故かといふに漢語といふ名目を支那語がわが國に輸入せられたものをさすといふことにすれば勿論之にあてはまる語は少く無いのであるけれども、又わが國で作つて漢字音で讀む語が少くない。ことに近時西洋の新知識を取入るゝ爲に新に漢字を操縱して作つた多數の語の如きは固より支那から輸入した者ではなく、從來わが國で用ゐて來た漢字を用ゐて新に日本で造つた語で有る。それ故に其等は外來語といふことの出來ないものであるが、しかし又純粹の國語といふことも出來ぬもので有る。そこで我々が漢語と稱ふるものには其の源について又成立についてわれ〲はかやうな物をやはり漢語と云つて居るので有る。そこで我々が漢語と稱ふるものには其の源について又成立について考ふる時は少くとも次の二に大別して考へねばならぬもので有る。

一、本來の漢語　卽ち支那から傳來したもの、又は支那の文獻に源を有するもの。

二、本邦で造つた漢語　卽ち本邦で、本來の漢語に基づいて造つた語又は漢字を音讀にして本邦で造つたもの。

この第二のものは嚴密に云へば漢語といふことの出來ぬものゝやうで有るが、しかし先にも言つたやうに固有の國語と云ふこともの出來ぬから、やはり漢語と呼ぶより外に方法が無い。

と云はれた如きでも漢語の範圍に關して兩說があることが分らう。

私は今、山田教授に從つて和漢熟語をも漢語の中に攝することゝしたい。且又常識では漢語と云へば二字以上の熟語を意味すること多く「佛を信ずる」・「詩を吟ず」・「甲か乙か」の類を漢語とは一寸考へぬ。けれども今は之をも漢語とする。

漢語の意義をかく定めて、さて「漢語と國語」の題目に包括せらるべきものは何か。

1　吾が國の言葉（廣義の「國語」）の中に表れた漢語に關する諸相

2　純粹なる吾が國の言葉（狹義の國語＝和語）に向つて漢語がいかに影響したか、いかなる結果を生じたか

と云つて可からう。かうなると、もはや「同じき事項に對」するといふやうな制限は存在せぬ。

以下この立場から種々の相を眺めて見ようが、先づ今日吾が國の言葉の中に存する漢語の增加してゆく狀態を跡附けて見よう。

三　漢語が國語の中に增して行く一統計

私は嘗て平安朝初期を竹取物語で、中期を枕草紙で、晩期を今昔物語で代表せしめて、この三書の字音語が如何な割合で增加したかを計へた。無論、今昔物語は全部には當らないで卷十六本朝付佛法、卷十七同上、卷廿四本朝付世俗の三卷に止めた。これは註校日本文學大系本でこの三卷の分量が丁度枕草紙と同じいからである。（卷十六・七と同じき內容よりも異なつた部類を取る方が優つたに惜しい事をした）又竹取物語は大系本で三十四頁であるが、この分量は枕草紙の發端から第三十二段「文月ばかり」の「氣色どもは憎からず」までに當るから、枕草紙の此處までの字音

語を以て竹取物語と比較すると、

竹　取　物　語	90語	$\frac{194}{90}=2.155$ 倍
枕草紙(第三十四頁マデ)	194	
枕　草　紙	720	$\frac{1498}{720}=2.08$ 倍
今昔物語(卷十六,十七,二十四)	1498	

今、竹取物語を清和の初(皇紀一五二〇)に、枕草紙を關白道隆薨去の年(一六五五)にかけて見るとその間は一三五年。今昔物語を後三年の役(一七五〇)にかけて見ると枕草紙との間は九五年となる。

2.155÷135年＝.016　　　　2.08 ÷ 95年＝.0219

即ち竹取物語－枕草紙よりは枕草紙－今昔物語が著しく率が上つて居るが、是は竹取物語・枕草紙はいはゆる女房文學であり、今昔物語は男性文學である爲で、いかに漢語が當時の男子の間に優越した文化の象徵として使用せられたかゞ分る。德川時代の「失念と云へば立派な物忘れ」は必ずや平安朝にも適用せられたと信ずる。この漢語を作る所の字音は卽ち支那語（たとへそれが歪められたとは云へ）だから之を含む者は、今日リード　Lead　する、カツト　Cut 代りに、ゼントルマン　Gentle man　ぶるが幅を利かすのと同じく橫行したのだ。何時の世にもモボの多きには困る。

四　漢語構造の分類

漢語の短きは無論一字より成る。例へば「案を議す」「文を評す」などがそれだ。しかし二字のが最も多數で、三字

之に次ぎ、四字のものもある。「傍若無人」「以心傳心」「不可思議」など、又單語を合せた者には隨分長いのもあつて官衙の名稱などに多い。

今二字のものに就いてその構造の種類を分けると、

1 異なつた意味の二語よりなるもの。

天地　山川　恭儉　知識　出納　盈虚

2 一の名詞とその屬性とよりなるもの。

月光　山色　人面　獸心

3 形容詞と一の名詞とよりなるもの。

大孝　純忠　名山　秀才

4 主語述語より成るもの。

地震　日沒

5 動詞とその客語とよりなるもの。

入學　卒業

6 副詞と動詞とよりなるもの。

凱旋　苦學

7 助動詞と名詞とよりなるもの。

[illegible]　[illegible]

不義　非禮　所作　可能

8　助辭を履む副詞のもの。

粛然　莞爾　突如　煥乎

9　双聲若くは疊韻より成るもの。

髣髴　逍遙　崎嶇　霹靂

10　同じ意味の字を重ぬるもの。

科目　規摸　威儀　收入　排泄

11　形は（1）の如く異つた意味の二語よりなるものの如くなれどその意は同じからぬもの。

多少　緩急

12　重語のもの。

陽々　悠々

となり、古文などの普通ならぬを出せばまだまだある。而して（8）（9）（10）（12）の如きは支那語の特質より來た結果たる事は「漢字の研究」のその條に述べて置いた。

五　國語と誤られる漢語

漢語は今や吾が國語と渾融して、漢字で書かれたのを見ねば漢語と思へぬものさへある。

按察使(アゼチ)　藐姑射(ハコヤ)　新發意(シボチ)　埒(ラチ)が明かぬ

の類がそれだが、山田教授はその犀利な眼光より

相　サガ　浮世の相　　　　殿　ドノ　太尉殿

枠　ワク　籰の𥮾　　　　麥　ムギ　その𥮾音メキの轉

等をも指摘して普通に純粹の和語だと片附けて居るものに案外漢字の音より起つたものゝあるを明かにせられた。

貞丈雜記に「手紙は手簡なテカンと讀み又テガミと讀み違へたるなり」とあるから紙も簡(カン)の音轉となる。又鼓が漢官儀の陥(ヨミ)摩(?)鼓が陥志の都盧より出たとの說も有る。

六　漢語の渾融した原因

かく渾融した原因について山田教授は、

其の原因の最初のものとして數ふべきは日本人が漢語といふものに馴れて之を操縦し得るやうになつたといふ事が無ければならぬ。次には之を用ひる事を好んだからと見ればならぬ。次には何が故に之を用ゐることを好んだかといふことになると隨分面倒になるが一方には其を用ゐるといふことは用ゐる人間に相當の知識が有るぞといふことを示す爲にも役立つといふことが有つたらうし、一方には凡俗の間には知らせたくないといふやうな事を語る爲に多少隱語的の氣分も有つたであらう。しかし此樣に漢語を好んで用ゐるやうに至らせた第一の原因は漢語が、文化の程度の高いことを示す象徵のやうに考へられて居たからで有ると思ふ。

と云はれたが、私は之を内的原因として更に外的原因もあるで無からうかと思ふ。その外的原因として漢字が日本流

に發音するを得て在來の國語と善く融け合うた（安藤教授の說）とか單音綴の簡短な音が國人の嗜好に適した（龜田學士の說）とか云はれて居たが、高橋龍雄氏が「國語の本質と漢語」（斯文第十三編第十號）「漢語が國語となる根本原理」の中）に於て、

> 日本國語は二音節の語が最多數で、之が國語の基調となつて居る。
> 漢語は元來一音節一字であるが之を國語の二音節に直して仕舞つた。例へば菊鐵甲なども元は Kik. Tets. Kap で有つたらうが、キク、テツ、カフと二音節に改めた。千岩金銀などのンの撥音なも一音節としてカンガンキンギンとし、拗音の狂（キヤウ）共（キヨウ）光（クワウ）宗（シユウ）昌（シヤウ）松（シヨウ）中（チユウ）長（チヤウ）重（チヨウ）なども皆キヨー、コー、シユー、ショー、チユー、チヨーの如く二音節にすれば國語の基調にピツタリあてはまるやうになるのを悟つた。
> 國語でヤマ、カハといふのを漢語のサン、センと言ひかへても音調の基礎に何等の狂ひを生じない、マツをショウと言ひかへても其處にショ一音節ウ一音節合せて二音節の合致が有るから何の不思議も無い。

と述べられたのも面白い觀察と思ふ。

言靈の幸はふ國と云つたその言靈の力が氣短かな國民性の現れかは知らぬが吾が國民は長い單語を好まぬ癖があるやうだ。今日プロと云ひブルと云ひモガと云ひテロと云つて平氣で居る國民には二字その多くは四音節の漢語の喜んで取入れられたは自然であらう。漢語の青年訓練所さへも青訓、東京帝國大學が東大、傳染病研究所が傳研、文部省美術展覽會が文展で通つて居るは何を語るものか。

七　漢語の成立手續

さて山田教授は和製の漢語の成立手續から見て之を五分してその（一）には、

正しい漢語の用例に基づいて吾が國で造つた者で有るが云々……其の雅馴な點は支那本國の語に比して劣らぬ。其等は本邦製と云ふ條、純漢語と見てよい者であらう。

と云はれた。私はその一として掛けまくも恐き事だが、天皇　といふ語を考へたい。この語は漢土でも絶無では無い。秦の始皇帝が二十六年に「六王、咸その辜に伏して天下大に定まる。今、名號更めずんば成功を稱へて後世に傳ふるなからん、其帝號を議せよ」と令したので、群臣相議して

古は天皇有り、地皇あり、泰皇ありて天皇最も貴かりき云々

と復奏した中にも見える。この天・地・秦の三皇は所謂三皇五帝にもあてはまらぬから廣く通用したものでも無いらしい。後には神祕的なものとなりて抱朴子には、

黄帝峨嵋山に至りて天皇眞人を玉堂に見る

とか、拾遺記には、

頻斯國に大石室あり、壁上に三皇の像を刻す、天皇は十三頭云々皆龍身

とか見える。即ち決して上御一人を稱へ奉る言葉にはならなかつた。たゞ唐の高宗の上元三年に帝を天皇、后を天后と稱した事はあるが、この年は吾が天武天皇の五年だから、聖徳太子が

東天皇敬白西皇帝云々

の聘辭を用ひられたよりは六十九年の後である故に、この語は吾が國にて先、御撰定になつたのである。世界無比の御地位を申すのだから獨特の語があるもふさはしい。

又日本書記孝徳天皇三年の條に惟神といふ語の下に、

惟神とは神道のまに〳〵して亦自らも神道あるを謂ふなり

と註してあるのも吾が國獨得の意義ある爲である。漢土では宋書符瑞志に惟機惟神敬昭文思と見える如く單なる神の意に過ぎない。

行幸は唐書に、御幸は漢書に見えて正しい漢語だが倶に主上に用ひたのを、吾が國では至尊と上皇とに用ひ分ける。又皇后・東宮には行啓といふがこの字面は漢土に無い、詩の元戎十乘以先啓行に本づいたで無からうか。而しこの語を三宮東宮に系けたは奏と啓とを使ひ別けるに因んだらう。かく漢土では區別せぬをも吾が國俗に從ひて尊卑を別てるものこの他にも猶多いが今は略する。

漢語の成立手續その(一)として山田教授は、

元は漢語として正しい語で有つた者をば吾が國で其の發音なり字形なりに似て居る文字をば尤らしく當てたもので例へば今の景氣不景氣といふ景氣の如き經紀を此の字にかへたので有る。

と云はれた。按ずるに書簡文の御機嫌克の機嫌なども元は譏嫌にて文字のまゝにソシリキラフ意だつたが、佛教で譏嫌戒といふ語があつた。その本意は「人よりソシリキラハル、如き事を戒愼する」であつたが、遂に人の譏嫌する所を覔ひ知るの意に轉じて「内心ノ思ハク、人ノ氣受ケ」となり、更にその人の「氣分・起居」の義となれるが今の御機嫌、さて人の氣受などより機を見るに移して遂に譏を機に改めたもの。人の愚かなるをバカといふは、梵語にて Baka は痴漢・無頼漢・僞善家等に名づくる字なればこの意味の寺内の隱語だつたらうが、それを秦の趙高の故事に託して馬鹿の二字を當てたものもこの例とならう。趙高のは奸智にこそなれ愚かな者にはならぬ。又歌舞妓の語は杜氏通典に唐

散樂を列ねた中に歌舞戯とあるによられたか。日本後紀の延暦十八年の神宮の事の條に歌舞伎とある。伎は伎能の伎だから戯と略同じい。然るに出雲の大社の巫女（カンナギ）お國が京都に出でゝ興行するや、當時既に存せし傾者（カブキノ）（アバレ者・男立（ダテ）の類）に聯想せられてカブキ芝居と云ひ、之に漢字を當てゝは歌舞妓芝居と書いたものなれば亦こゝの例だらう。但し今日は却て伎と書くことが多い。

又もと正しい漢語への宛字だつたらうが、今日はその漢語の知られぬ爲に、已むなくここに入れねばならぬ者もある。例へば

辛抱　コラヘ忍ブ

心法ヲ守ル意かと云ふがシンバウのみでは不十分だらう。

かく動詞を付けぬのに左の類がある。

案内　案内ヲ知ル意　御案内の通

還迹　還迹ヲ量ル意　平家物語の渡邊渡の妻が遠藤盛遠に答ふる詞に「かやうに申せば御還迹もありぬべけれど」義經記の「此く申せば女の心の打返りて還迹せさせ給ふべきなれど」などは「心意ノ内ヲ不審シク測リ思フ」の義なるが、還迹は心バセ、心底の義なるのみ。

心中（ヂユウ）　心中ヲ立テル意

仰山　甚ダ大ナルコト

大言海には「希有さにの轉、驚き云ふに因りて濁音となる」とある。

支度　物事ヲ用意シ調ヘ設クルコト

都合　手筈ヲ調ヘルコト

言海には「手番（テツガヒ）の略轉にて字は假借なり」とある。さて同じ都合でも總計の意は漢文に存する。

杜漏（ヅロウ）　事ヲ行フニ取締リガナイ

漢語の成立手續の（三）としては山田教授は次の例をあげてゐる

漢字を字形によりて分解して二三字にした者で、其を一の熟字の形にしてその元の字の意味に用ゐるもので有る。

米　八木　小右記、東鑑

松　十八公　謠曲

更に漢語の成立手續の（四）としては、

もと國語を表す爲にあてた漢字をば後に其の字面のまゝに音で讀み、其が爲に漢語のやうな形になつたもの

なこ　尾籠　ビロウ

かへりごと　返事　ヘンジ

ひのこと　火事　クワジ等

を擧げられたが、私もちと附け加へよう。

さはやま　澤山　タクサン　　てらしあはす　照合　セウガフ

算を破る　破算　ハサン　　つれ〴〵　徒然　トゼン

でばる　出張　シユツチヤウ　　點を合す　合點　ガツテン

面ふせ　面倒　メンダウ

金うつ　金打　キンチヤウ　佛神の前にて鉦鼓、鐘、鰐口などを打ちて誓を立つるを金(カネ)うつと云ひ、それを又音讀して名詞とす。

氣くばり　氣配　キハイ　　無いが代　無代　ムダイ

漢語の成立手續の(五)には和漢經糅の語を擧げ、山田教授は之を三分して、

第一は俗に云ふ湯桶語(上を訓、下を音)

宛字　相對　大勢

車座　手代　猪武者

第二は重箱語(上を音、下を訓)

樂屋　座敷　先手

團子　竹輪　本屋

第三は音訓複語

わか本の心のほんしやう(枕草紙)

優にやさしう(平家物語)

此の類に攝すべきに

金山　カネ ⎫
僊山　コミチ ⎭ キンザン

秦　ハタ、シン

玄　クロゲン

元　モトゲン

以上五つの場合を出されてゐる。

私のこの題目に對する態度は山田教授の「漢文漢語の影響によりて生じたる」と明確に限定せられたのよりもゆるやかな爲に、「和製の漢語の成立手續から見て」の眼界を今少し擴げたい。

八　漢語の成立手續

漢語の成立手續の第六には漢語に倣つて作つたもので、今迄に述べた五つの場合の始め四つの如き根據もなく亦第五にもあてはまらぬものである。

風帶　几帳ノ上ヨリ垂ル、細長キ布帛(キレ)

風鎭　掛物ノ軸ノ兩端ニ掛ケテ鎭(オモリ)トス

卦算　罫ヲ引ク算木

粘葉本　製本の一樣式

拂曉　漢文に拂曙の語はあるが拂曉はない。

晴耕雨讀　この本據、管見に及ばぬ。因りて思ふに劉長卿の春雨向田耕、高靑邱の春犂待雨耕又は鉤簾看雨耕の如く漢土のやうに雨の少い大陸的の氣候では雨を待つて耕すべくして中々雨讀では無からう。必ずや晴好雨奇や、韓愈の詩の朝出耕、夜歸讀、古人書盡不得息などから導かれて吾が國に適するこの熟語は出來たらう。

倣つて作つたでは無いが、彼にあるのを採る際に誤解したのもある。是はた彼の土の人の敢てせぬ所だらう。

案山子　傳燈錄に主山高案山低とありて、この案山とは低くして机案の如き山。その案山のあたりに耕地があつて鳥オドシも立つて居たと見えて禪僧の問答の時に面前案山子也不會の語が亦傳燈錄にある。之を或る人の案山子と連ねて讀み、且之を鳥オドシそのものと思ひて書き始めたものとせられる。

漢語の成立手續の第七には國語に鹿爪らしく漢字をあてゝ漢語の如き觀をなすものである。

鳥渡　チョト　　兎角　トカク
屹度　キツト　　獵虎　ラツコ

因に國語ならぬものに漢字をあて漢語の如き觀をなすものもある。

お轉婆　大言海に和蘭語 Ontaambaar　　金米糖　言海に西班牙語 Confeito

九　漢語から影響を受けた國語

山田教授は又漢語の影響を受けて生じた國語があるとて之をその成立から二分して

（一）その字の訓注を直譯して其の字の國語に用ひたもの

鐵　黑金也　クロガネ
銅　赤金也　アカガネ

（二）漢語を其の字面のまゝに和讀して其の語に當てたもの

雨脚　アメノアシ

面皮　ツラノカハ
　其の意を顧みず字だけを直譯したもの
　桑門　クハノカド(僧侶)
　露臺　ツユノウテナ(露は屋根の無いので有るが其の意味は出ない)
と說かれたが、今一つ之に附け加へたい。

(三)　字音を直に和語として扱つたもの。

落日の紅はそめいろの山をうつして(謠曲羽衣)この山は蘇迷盧で卽ち須彌山。今は紅は染色とつゞけて居る。
獅子とらでんの舞樂の砌(ミギン)牡丹の英(ハナブサ)匂みちみち(同、石橋)「とらでん」は團亂旋で舞樂の曲名、今は之を虎となして獅子虎とつゞける。

因にいふ、私の鄕里は福井縣だが、越前四個本寺と云つて眞宗の末派の小本山が四ヶ所ある。舊は引くるめて三門徒派と云つたが今は各々派號がある。その一に盂蘭盆會を七月十六日前に行ふのがある。之を俗にオモテ盆といふ、之も盂蘭盆をウラ(裏)盆と考へての上の稱へ方だ。

一〇　漢語が國語音韻に及ぼした影響

吾人の祖先が漢字を受入れて之を讀習した爲にその音韻の上にいかなる事情を生じたか。山田敎授は之について

國語の音韻は漢語によつて著しく變化を與へられたので有る。元來わが國の固有語には濁音を以て始まる語とラ行の音を以て始まる語とは無かつたので有る云々。…まだ有る、それは拗音が國語の中に取込まれた事で有る云々。…次には促音と撥ぬる音とを生じた。其の前に音便といふ現象を說かれはならぬ云々。……音便な事實の上から云へば二音以上で成立つ語の中、尾に

於ての或る音をばイか　ウか　ンか　促る音かにすることで有るが云々。……かやうな現象がいかにして何時から起つたか云々。……現今の吾が漢字音の組織を見ると一音の語は別として、吾が國語で二三字で書きあらはすものはアイ（愛）アウ（央）アン（安）アツ（壓）の如く「イ」「ウ」「ン」「ツ」で終るもの丶四種に攝することが出來る。此の四種の音尾の姿が上の四種の音便の姿に並行して居、而も大體同じ姿になつて居るもので有ることは何人も認め易い事で有らう。此は一方から云へば漢字の音が國語に入り、其の感化によつてこの四種の姿に整頓せられたものと云つてよい現象で有るが、其の四種の音尾が逆に國語の音韻組織の上に感化を及ぼしてかやうな（音便をさす）現象を呈せしめたと見らるゝ云々……撥ぬる音の源は漢語の音尾が悉曇家のいふ所の三内の鼻音で終るので有つて云々。……かやうな音で終る語といふものは本來の國語にはなかつたので有るが、其が先づ音便として語の中間にあらはれ後には一語の尾にもあらはれた云々。……促まる音の源は漢語の入聲で有る云々。……この入聲で終ることは先づ吾が國語に取込まれなかつたと見らるゝので有るが、さやうな漢字が二字相合して熟語をなす時には合戰、一體、學校といふ時のやうに、その本來の姿に復つて入聲になることも有る云々。……國語の中に促る音といふ現象の生じた源はこゝにあるのである。この姿が國語の上にも摸倣せられたのが促る音便で有る。

と述べられた。この中の音便說明にはその卓越した着眼に敬服すると倶に倍〻その當時の漢語の力の偉大だつたに驚かされる。

私は今之に附加すべき何物をもたぬ。たゞ本講座としては之に因んで述ぶべき事があるからそれを次に出さう。

（イ）　字音の尾のウ

字音について用ひられたウには二種ある。一は純粹と云つてもよいウで寧ろ和行に屬するもの、一は ng の音を寫す爲に用ひたものである。ng をしもウで寫したのは當時ングの寫し方が許されなかつたからの窮策でもあるが、又考へ方によりては當時のウの音價値が今日のよりも ng に近かつたので無いかとも思はせられる。蓋し同じき音符た

るウを用ひながら、その實、純粹と云つてもよいウと ng に近いウとの二ツを表したとすれば、そのウたるや音符の價値を失つたものとなるが、一方にウでその音を表しながら一方に ng の音をその字に認めて居る事實はやはりかく考へざるを得ぬ。一方に ng の音をその字に認めて居る事實とは何ぞ。即ちガギグゴ（ng に a, i, u, o の合ひたる者）に

相模（サガ）　香美（カガ）
愛宕（タギ）　久良（ラキ）　餘綾（ロギ）
香山（カグ）　望多（マグ）　勇禮（イク）
伊香（カゴ）　愛宕（タゴ）

曲げて用ひられたる點は相（サウ）・香（カウ）・宕（タウ）・良（ラウ）・綾（ロウ）・望（マウ）・勇（イウ）の時にも幾分 ng の發音を帶びて居た結果で無からうか。今こゝに出した諸例は本居翁の地名字音轉用例から取つた爲に、偶然にも韻字で云へば東陽と蒸との三韻に限られたが、この音尾をもつは東・冬・江・陽・庚・青・蒸の七韻に屬する諸字である。

純粹に近いウといふは ng には遠いとの意で、ア行の u に比すれば寧ろ不純だらう。

考羅（カウ）
發昕（セツ）（長谷雄）　襖子（アフ）　芭蕉（セウ）

の如くワ行の中に曲げらるゝは wu たるべきを示すから。

（ロ）　ハ　行　の　發　音

次にハ行の發音が幾多の變遷をもつは別に述べられる人があらうから今は述べぬ。漢字の音でフを履むものは古はfu で無くて p だつたと云はれる。支那の古音は南方に存するのだから Williams の Tonic Dic. of the Chinese Language in the Canton Dialect を用ひると

鴨　アフ ap　　押　アフ ap

邑　イフ yap　　揖　イフ yap

葉　エフ ep　　渉　セフ ship

の如く皆 p になつて居るのが之を證するから、或る時代にはフの假名を付けても p に近く發音したものと見るべきだ。更に又考ふべきは今日のアフ、イフ等の發音よりも、今少しフの發音が明瞭だつたと思はれるは、左の如く曲げて居るものである。

合志　カハシ

姶羅　アヒラ　雜賀　サヒガ

邑久　オホク

又今日カ行で發音する漢字の中に實は u 音であるものがある。今日でも、

上海 Shang*hai*　　漢口 *han*kow

であり、梵語の對譯でも

阿羅漢 Ar*han*　　摩訶摩耶 Ma*ha*maya　　羅睺羅 Ra*hu*la

となつて居る。是は字音を傳へた當時にｈ音が無かつた爲に、その近似音のｋに置き變へたものとせられる。

（ハ）撥　ね　る　音

又今日は撥ねる音はすべてンで寫すが、是も古はＭとＮとの二ツに分けるべきものだと知つて居たと見える。その證には和名抄に上野國利根郡の郷名「男信」を奈萬之奈と訓じて同じきンをマとナとに別けて居る。今日はナンシンだに何故ナンはナマとシンはシナとなるか、ナマシマとかナナシナとかになされぬ理由はいかゞ。この疑問を抱きて遂にその理法を發見したは本居翁の忠實なる紹成者だつた若狹妙玄寺の義門師であつた。從來も撥ねる音を二樣に假名付けるべきものとは知つて居たがその理法をば知らぬ爲に

韻書の上平聲にはン、下平聲にはムの假名｜或問劍字篇

韻鏡の開轉の字にはン、合轉のにはムの假名｜和字大觀抄

などの説があつた。本居翁はその古書の用法に合はぬ點のみを見て、その著「字音假字用格」ではその差別あるべき由なし。韻の假字にてムン適用すべし

と云つてのけられた。然るにその地名字音轉用例を著されるや古書の用法を歸納せられた結果

ンの韻をマの行に適用したる例

ンの韻をナの行に適用したる例

と類從せられざるを得なかつた。こゝ迄進まれては今一歩にしてその門は開かれるのであつたが惜しいかな之を蔵かれなかつた。按ずるに同作の字音に關するものは、

字音假字用格　　安永四年自序　　同五年刊

漢字三音考　　天明四年の序　　同五年刊

地名字音轉用例　　序　　寛政十二年刊

の順に成り又は刊せられて、翁は寛政十三年たる享和元年に歿せられたを見ると、この轉用例も心ゆく迄推敲して生前に出板せられたものの最も晩作たるは解るから、天が今少し年を假したらば更に突進せられたらう。

私はこゝ迄筆を進めて今日奎明の化をうれしむと倶に先賢の不幸に對して同情の涙を禁ずるを得ぬのである。金光明最勝王經音註（平安朝の末期か）には撥ねる音をムと今一つ（即ちヌ）に區別すべきものとして、その理法をこそ明言せね正しき例を集めて示してあるのだ。故に若し本居翁にしてこの音註を一瞥だもせられたらんにはそれこそ朝飯前にその理法を看破せられたに違はぬ。然るに足利氏の時、文教全く地に墜ちたからこの種の物は皆秘庫に藏せられて學徒の目に觸れぬことゝなり、徳川氏の偃武尙文を以てしても猶能く之に依りて研究するを得られなかつた爲に可惜この不覺を取られたのである。然るに今日は西海の僻邑に越在する私でさへも、その音註を見られるは聖代の恩澤仰ぐべし貴むべし。

さて義門師はその眞宗の聖教に何時も信心（シンジム）、安心（アンジム）とあるを明らめるがその目的であつた。今や「ンの韻をマの行に通用する」ものを見せ付けられては胸躍らざるを得ぬ。かくて

ナの行に通用する

ものは韻字を以て云へば眞・文・元・寒・山・先の六韻

マの行に通用する

ものは同じき侵・覃・鹽・咸の四韻に屬する諸字なることを知り、進んでは悉曇にて三內と立つるその舌內（眞等の六韻）字と脣內（侵等の四韻）字とであるを知り、更に韻鏡にいふ十六攝にて云へば舌內は臻山、脣內は深咸の二攝に歸するを覺りて

臻山　ラリルレロ　　　　　　チ
　　　ナニヌネノーン　その入聲音　ツ

深咸　マミムメモーム
　　　バビブベボ　その入聲音　フ

をその通則となして男信三卷を大成せられた。ムに相對するものはメだのにンを用ひられたはその宗乘にはムに對するはンだからその祖敎を重ぜられる敬虔の態度だ。

世の氣運といふは不思議のもので義門師と相前後して太田全齋も關政方（マサミチ）も倶にこゝを看破し、全齋は漢呉音圖說に「三撥（ハネ）假字并フツクチキ韻」の一章を立て、政方は傭字例といふ專書を出した。而してこの三大人は倶に轡を把りて相語られたので男信下には、

文政七年とみの事にて江戸に出かけるに云々ゆくりなう全齋太田方とて備後福山人の音韻の學に賢きに遇しに因て、卽「文化の五とせにか先一わたり脫稿せし本なり」見せけるに己が考置ける趣と大旨暗にと符ちつゝ其自撰の漢呉音圖並に音圖口義など數々なも示し、猶口說なも惜まぬ情々しさ將いと懇なりければ屢往きては得たる益の有るな件の稿本に書入などもして持て歸りし後再治して云云復かくものしたるは天保六年六月廿二日

と見え、又政方の傭字例が天保の末に出板せられて、その十三年七月に大阪の書肆の種玉堂儀助から師に贈られると、師はその說の男信と暗合する者多きを見て非常に喜び、傭字例の各條に意見を註した一冊をも添へて突如、政方の許

に送られた。當時の事だからこはその年の極月二日に屆いたが、政方亦一書を艸して師に答へた。さてその翌年師は備中に赴いたのでわざわざ笠岡に抵りて政方を訪はれたが實はこの歸次に大阪で病を獲て遂に師は遂に遷化せられたのである。だから政方との會晤は師の最後の學術的興會であつたらう。今、全齋と政方との著作を師のに比すると全齋のは擬ぬる假名三種(ムとンとの外にングを寫すウ)に亙りて論じた所は流石にスケールが大きく、政方のは隨筆的に個々の事實を考說したので最も體系を備へて居らぬ。

各　說

一　形について

漢字は義字であるからその形を誤るは、聲字でその綴方(スペリング)を誤つたと同じい理だが、漢字は畫が多くて煩瑣だと非難せられる代りには又一點一畫の違ひは目立たずにも濟む。且又その字が多い爲に、誤つた類推などもその間に行はれて倍々異體を生ずる。

私は前に漢字が吾が國で國字として用ひられた以上、たとひ一字より成立つものでも亦漢語として取扱ふことにしたから、本題目に於ては漢字がいかなる風に邦人に誤られたかも亦一瞥せざるを得ぬこととなつた。幸に新井白石の同文通考に譌字等を出してあるから之を引用したが、それも初の六七項で、その餘は今思ひ付いたまゝに出したから嘸、掛一漏百だらう。

一　全く譌字といふべきもの(下のが正字)

灵——靈

駄——駄　　坐——坐

戈——才——歳

二　簡省に從つた餘りに乖謬を致したもの

參——叅（參の俗）　　只品——品

區区——區　　孝學学——學

才——等

支那でも同樣の事があつて明の楊升菴外集に錢作レ夂畫作レ尽とある。吾が國でモンメに夂を用ひるも錢の俗字を假りた者、三矢博士は錢の旁（ツクリ）の戔の象體を、畫の斷續を混視して夂の如くに書き且つ勺の內の二線を一線にした者かと云はれたが、私は个の原形介を夂に作るその變體かと考へるので元は錢一个を表したに過ぎぬだらう。大言海に「夂は錢ノ字ノ古體ト云」とあるも精しからぬが「或云文ノ字ノ艸書ト片假名ノメトノ合字」は蛇足だ。大言海には何れ削つてあらう。

三　あらぬ類推から作つた文字が、他の字と混雜するもの。

仮——假　集韻に反と同じ

体——體　集韻に笨と同じ。但しのこ字は支那でも體の省體に誤用。

黍——忝　字彙に卽添字　蓋し支那では添を黍にも作るがカタジケナシには用ひぬ。

芦——蘆　集韻に芐と同じ。芐は地黄

近頃は濱の字は多く浜に作るが、浜は安レ船溝也で音もハウ。又本町一丁目などの丁は中々便利だが、丁に町筋などの意は無い。

是に今日は文句の云はれぬ文字もある。熊本縣には　水俣　といふ地名があるが、この俣の字を用ふるは他にも多い。この俣は俟ツの字が本體で、漢字に於ては往々ロをムに作る　唯の時など）から、その反對にムをロにして以て俣を得たのでマタはマツの將然形である。之を股から來た者とするよりもこの方が簡明だ。

四　記錄書キ又は抄物書キと云はれる者。

大納言を大糸言　　中將を中爿

應永を応永に　　醍醐嵯峨を酉酉山山

厂—雁・歷　　广—磨・摩・魔に

ササ—菩薩に　　めめ—娑婆に

佛—佛頂に　　莑—華臺に　　釗—金剛に（剛の毫を寸にも作るから）

これ等は佛徒が聞書キに用ひたもの。今日の學生には文學や科學やのが山々ある。

五　二合字といふもの。

召——刀自　　眞本上宮法王帝說に

畠——白田　　和名抄・大神宮儀式帳・延喜式等に

榊——神木　　新撰字鏡に。萬葉には神樹と

貼——日古（彦）　出雲風土記に

六　同音を借用したもの。

旦那——檀那　　利足——利息　　木丁——几帳　　往生（無理往生）——押狀

松容——從容　この松容につきて一笑話あり。古事談に中院入道（源雅定）の六箇能の第一に松容とあるを、大日本史に我有六能松君云々……松君蓋松若丸也神樂曲と譯出したのは松容を從容の借用字とは知らぬ爲に松君の誤字と斷じ、その松君とは神樂の松若丸の曲だから神樂を善くせられるのを一能と見られたのだが、本朝文粹大江匡衡の文にも松容被上啓事由於殿下とある如く、松容は人の氣象風采の優裕たる狀卽ち從容だ。この種のものを擬音字と稱して、あてた文字の正しからぬを指摘せられた有益な研究が三矢博士の「國語の新研究」にある。

七　國字といふもの。

辷　すべる　　辻　つじ　　凪　なぎ

椛　もみぢ　　笹　さゝ

栃　とち

國字で最も大なる存在をもつはこの字だらう。日本を三府四十三縣に分けたその一を背負つて居るから。但しその起源は案外に明かならず、萬は十千なる故に木に從ひて「とち」となれるかとは三矢博士の說なるが、果して然らば萬葉の戲書とも云ふべしだ。すべて、國字は厄介なものだ。余前年支那に遊びし時、北京公使館の中畑書記官と倶に開封に赴いたが、書記官は支那官憲に打電せられるのに中畑と書かれる。余マサカ自分の姓を誤られるでも無からうとは思つたものゝ、餘りに不審しかつたから御尋ねすると、畑といふ字は漢字に無い爲に支那電信

で扱ふ文字表（漢字の研究の中に述べた）の中に存せぬから類似したこの字を代用するのだと敎へられた事がある。所が今は支那文字表に畑の字を見出すかも知れない。一縷の光明を認めたは愉快だ。

民國四年に出た上海商務印書館の辭源に、

辻　日本字、讀むこと子期 Tzuchi の若し、十字路を謂ふなり

込　日本字、讀むこと壳米 Komi の若し、入るなり

と出し、又

樣　日本にて人を稱するの敬語、某樣とは猶、某君と言ふがごときにて上下男女相稱するに皆、樣と曰ふ

殿　日本にて人を稱するの敬詞、多く書牘中に於て之を用ふ

と出し、容庚の中國文字學に

兩字以上合成の簡字の一字にして兩字以上の音に讀み作すものは始めて日本に用ひられ、俥の人力車たり、辻の十字路たり、[illegible]の午前たり、𨋢の汽車たり、𠳐の電話たる如き。其の音は讀みて、人力車、十字路の三音及び午前、汽車、電話の二音となす。余以爲らく推行して種々の簡字を作るべし。（引用もと皆漢文）

と推擧せられるに至りては私の如き頑固の徒は何と御挨拶してよいかに惑ふ。

八　漢字の省略せられたもの。

呉公—蜈蚣　　委文—倭文

石寸—石村　　沓——韜

木村正辭博士の萬葉集文字辨證に「偏旁を省けるなりと云へる字ども」の一條あり、往見すべし。

九　用ふる場合の極めて多い爲に一種の符號の如くなつたもの

ゖヽ—候　ひ—也　ゟ—存

ゖつ—御　ち（被下、被成のち）

〆——貫、引墨

引墨とは嬉遊笑覧に「今封のシメを〆と書く是引墨なり、北山抄に封字のかはりに近代忽引墨と見えたり」とあるもの。〆をシメと讀むより安齊随筆にト占のトにてシム（占領す）の訓に出づとし、言海には直に「〆はトの字の崩れ」とせしが封じ目に×するの名殘ならん。之を貫の字に代用するは三矢博士も「一貫を一シメの義に取りたる者」、合計の場合に用ふるは亦「シメといふ讀聲より借りたる者」と云はれた。

一〇　その字の艸體より眞書の出て來たもの。

椙—榅　杦—杉　淛—淑

いづれも萬葉集文字辨證に詳かなり。

荒—荵

萬葉集に旗荒（スヽキ）とあるは荵（スヽキ）の艸體より出た字で荒武者の荒とはちがふ。

一一　二字より成れる語の一方の扁などが他へも添ふ。

婇女（采女）　㝯怜（可怜＝可憐）

嚠喨（劉喨）　喨の字は字書に「喨に同じ」とあるが嚠の字は無い。

還迹（景迹）　令義解に「景迹とは景は像なり、猶状迹といふがごとし」とあるが、唐寫本唐韻に行（オコナヒ）に注して「景

迹」とある方が簡要であらう。この行の義から轉じて「心意の中を不審しく測り思ふ」義となると景にも辶を加へて用ひられた。

一二　吾が國にて特に通用する文字。

礒　石巖なり

磯　石、水に激するを磯といふ

上野國の高田里結知識碑は神龜三年（皇紀一三八六）の物でその文に鍛師礒部君とある。狩谷望之の古京遺文に天平神護二年五月紀に上野國人磯部牛麻呂、姓氏錄に磯部臣とあるを引いて「礒の字、義に從ひて礒に作れども楚詞、碕礒の字に非ず」とあるやうに礒を磯として用ひたのだ。

用　モチヒル、ツカフ

要　モトム、チカフ、カナメ

古記に「必要有るに依りて宿廬に退下す」、古本今昔物語に「要事有りて郷に出るに」又「御要に充てらるべし」又「要用有るに依りて」續古事談に「これ猶要なき仕業なり」など皆、用にてあるべきを要として居る。漢土にはこの用法は無い。要用は宋書に「器に要用あれば貴賤同じく資す」と見えて、要は用の形容詞。

港　水の分流するもの　水中の舟を行（ヤ）る道

湊　水の上（ホトリ）の人の會する所なり

二字の義かくの如くなれば吾が國語のミナトは湊の字なるべく、港はむしろセトとあつるが適當である。言海は

セトの漢語として海峽をのみ出したが、海峽とまでにないセトも多く存する。然るに漢土でもこの湊の字はアツマルといふ動詞の方に用ひられて佩文韻府に出された四十六語でも名詞と確言出來るは絶えて無い。とは云へ港はやはりセトにのみ用ひられて、「石湖は僅に斷港の如し」とあるも舟を行る道だから斷の字が利き、「海上に黄崎ありて波濤、阻（ヘダテ）を爲す。一夕風雨ありて雷電震撃し開きて港となししかば號して甘棠港となす」とあるも黄崎が形を淸めて水道が開いたのを港と稱して居るのである。

吾が國でも古くはミナトには悉く湊を用ひて萬葉集でも湊が三回、湊入（ミナトイリ）が一回見え、倭名抄にも湊とあるのみだ。港の字をミナトに用ひるは外交關係で下田兵庫などを開いた時より始まるのではないか。若し然らば香港の字面に導かれたのだらう。香港は支那が鴉片戰爭の結果英國に割讓したもので事は天保十三年にあり、吾が外交がその覆轍をふまんを虞つた爲に香港の名が大きく當局者に印象せられたは想像せられる。香港は紅香爐山が九龍灣となすセトだから正しい用法だが、そを湊を云つたと誤解したものらしい。

一三　その語の本義に關せずに漢字をあてたもの。

無勿體（モツタイナシ）　勿體ブル、勿體ヲツケルなどの語より推せば勿體ナシのナシは「無し」にはあらじ。拙シ、辱シなどのナシに有（アリカ）りたるか。

一四　此方で造つた文字が漢土に存するのと混雜するもの。

栲　タヘ

多く穀（カヂ）（楮と同種）の木の皮にて織つた木綿（ユフ）の布をいふ。この字は狩谷望之の說では楮の異體に杼があり（音が同

じい）て時には者と宁との二つを重ねても書き、この重ねた者の中から者の日と宁の宀とを省きて栫の字となした。然るに後には直に考にしたのが今の字であつて漢土の山樗と解し、漆に類した木をいふ字では無い。

木綿　ユフ

天の日鷲が作つたと云はれるものは玉串や注連(シメ)に垂(シ)でるのでユフシデと云ひてこの字を用ひる。この時は穀樹の皮を折(サ)いたまゝである。漢土で杜仲(ハヒマユミ)（樹の名、正木(マサキ)のこと）の一名を木綿と云ふのや又今日いふ木綿(モメン)とは字面こそ同じけれ全く品は異なる。

鈕　クシロ

クシロとは鈴又は玉などを緒にて貫きて臂に紐(ユ)ひ付くれば金と丑（說文に丑ハ紐ナリと解すれば紐の意に用ふ）とにてこの字を造る。漢土の「印鼻ナリ」といふ字に非ず。

偲　シノブ

人を思ふ心より作つた文字、漢土の其人美(ニシテ)且(ツ)偲の「才力多し」と訓ずる字では無い。

鮎　アユ

神功皇后三韓征伐の時、その勝敗を占ひ給ひし魚といふ意にて魚に占を合せて作つたもの、漢土の別名、鯷(テイ)ナマヅと訓ずる字では無い。

縵　カヅラ

カヅラは鬘の字だが、わが古代には艸又は糸にて造つたから鬘の髟を糸に代へたのである。漢字の縵「無文の繒」

とは違ふ。

椋　クラ

説文に「廩の方なるを京といふ」とありて管子にも史記倉公傳にも用ひられて居るを、わが國では木造だから木扁を添へた。漢字の椋「木の名」とは異なり。

椅　ハシ

爾雅に「石杠謂之徛」とありて徛は石橋だ。今その扁を木に代へたが、「桐也」の字とは異なる。

この他杯を坏に、肉を完に作るの類、木村正辭博士の萬葉集文字辨證、訓義辨證を見るべきである。

一五　此方で許容して居る異體が往々他の本字と同じくなつたもの。

潟　音　セキ　干潟（ヒカタ）

瀉　音　シヤ　ウツス　ス、グ　吐瀉

この二字は倶に後出で、潟はもと舃ですましたこと漢書の溝洫志に「終古の舃鹵に稻粱を生ず」とあり、瀉も亦扁を要せぬこと禮記の曲禮に「器の漑ふ者は寫がず」とあるので分る。然るに倶に扁を加へると一層その形が近くなるので潟をも瀉と書く事となつた。それは何も現代の漢字廢止論者の誤用を材料にするで無い。那波道圓本の倭名類聚抄に既に然り。

苑　禽獸を養ふ所以の囿

菀　紫菀

天平十七年五月の寫經手實（大日本古文書二）に　法菀林章第一卷　とあり。

列

烈

法隆寺伽藍緣起幷流記資財帳（同上）に　白檀誦數貳烈　とあり。

一六　誤字が久しく代用せられた爲に、今日は居然として本字の觀をなすもの。

伊弉冊尊　この冊の字は冉の誤で、冉は漢音ゼム呉音ナム、だから伊邪那美命のナミにあてられたのである。その冉を冊にも書いた爲に遂に冊となつたが、今は之によりて冊諸（サツグク）など讀まれる。

宛　アツ　宛字　宛行（アテガフ）

宛は艸を屈して自ら覆ふなりと解する字だが轉義は宛曲・宛轉となる。但しアツの意は有しない。アツの意は實は充の字で有つて充の下半が夗となつた爲に死の字の上に點あるものとなり、その二ふたゝび變じて宀となりて今の字を見るのである。

慥　タシカニ

中庸の君子胡（ナンゾ）不慥慥爾の注に「慥慥とは實を守りて言行相應ずるの貌」と見え、廣韻には「慥とは言行の急なるなり」と有る。王引之は廣韻の解を優れりとして慥慥とは汲々といふがごとしと云つた。着實切實の意であるものゝ、タシカニといふ副詞とは稍違ふ。佐藤博士は慊の字が變じて慥になつたと考へられたが、延暦十五年渤海王を責めた國書に首尾不レ慥既違ニ舊義一とあるは最もよく慊の字たるを示すものと云はれる。

二　音について

漢語が國語となりては漢音・呉音もしくは唐音に呼ばれるが、唐音は姑く別に考へるとすれば漢・呉兩音である。

この兩音については「漢字の研究」に於てその來歷を略叙したから今はその相關する點を檢討しよう。

この說明には既に述べた韻鏡によると非常に簡明になる事があるが、その韻鏡が普通に行はれて居らぬ爲に之を利用するを得ぬは遺憾である。

今その相關する點を三類に分けて出すと

一　行によりて異なるもの

（イ）漢音バ行　呉音マ行

萬（バン・マン）　美（ビ・ミ）　武（ブ・ム）　馬（バ・メ）　木（ボク・モク）

（ロ）漢音ダ行　呉音ナ行

內（ダイ・ナイ）　尼（ヂ・ニ）　奴（ド・ヌ）　涅（デツ・ネツ）　農（ドウ・ノフ）

（ハ）漢音カ行　呉音ワ行

和（クワ・ワ）　胡（コ・ウ）　慧（ケイ・ヱ）

（ニ）漢音ザ行　呉音ナ行

人（ジン・ニン）　然（ゼン・ネン）

これ等の字は韻鏡では必ず同一の行にある。即ち字母の同じきものだ。

二　語尾の異なるもの。

（ホ）　漢音キ　呉音ク

石（セキ／シヤク）　役（エキ／ヤク）

（ヘ）　漢音ク　呉音キ

直（チヨク／ヂキ）　色（シヨク／シキ）　力（リヨク／リキ）

この（ホ）（ヘ）は正反對だが、韻鏡の圖面ではその何れたるか直に分る。

（ト）　漢音ツ　呉音チ

月（ゲツ／クツチ）　一（イツ／イチ）　達（タツ／タチ）　勿（ブツ／モチ）

（チ）　漢音イ　呉音ウ

影（エイ／ヤウ）　京（ケイ／キヤウ）　冥（メイ／ミヤウ）

（リ）　漢音ウ　呉音イ

蒸（シヨウ／セイ）　（蒸籠）

これ等の字も韻鏡圖で同一に取扱はれて居る。

三　音の組立の異なるもの。

（ヌ）　漢音アの段　呉音エの段

各　[illegible]

馬（バ・メ）　下（カ・ゲ）　花（クワ・クエ）　瓜（クワ・ケ）

（ル）漢音アンの段　呉音エンの段

山（サン・セン）　間（カン・ケン）

（ヲ）漢音アンの段　呉音オンの段

含（ガン・ゴン）　凡（ハン・ボン）

（ワ）漢音ウンの段　呉音オンの段

文（ブン・モン）

（カ）漢音インの段　呉音オンの段

音（イン・オン）　金（キン・コン）　品（ヒン・ホン）

（ヨ）漢音エンの段　呉音オンの段

遠（エン・ヲン）　建（ケン・コン）

（タ）漢音イの段　呉音エの段

衣（イ・エ）　希（キ・ケ）

（レ）漢音イの段　呉音オの段

意（イ・オ）　期（キ・コ）

（ソ）漢音イユウの段　呉音ウの段

久（キユウ／ク）　兕（ジユウ／ズ）

（ツ）漢音イヨウの段　呉音イユウの段

重（チヨウ／ヂユウ）　龍（リヨウ／リユウ）

重はオモシがヂユウ、カサヌルがチヨウなどの説もあれど重箱（ヂユウ）、輜重（チヨウ）兵にては窮する。これらはその語毎に從來の讀方に從ふべく一律には區別しがたし。

（ネ）漢音オの段　呉漢ツの段

圖（ト／ツ）　故（コ／ク）

（ナ）漢音オウ　呉音イユウ

勇（ヨウ／イユウ）

（ラ）漢音が長く、呉音はそれの約りたるもの

富（フウ／フ）　頭（トウ／ツ）　封（ホウ／フ）

（ム）漢音清みて呉音濁るもの

貧（ヒン／ビン）　神（シン／ジン）　疊（テフ／デフ）　地（チ／ヂ）

（ヰ）直音拗音にて漢呉音の區別せらるゝもの

白（ハク／ビヤク）　客（カク／キヤク）

强（キヤウ／ガウ）　相（シヤウ／サウ）

の二十三の場合がある。

四　漢音と呉音とにて同一の語でもその意を異にする者も多い。

一日　イチジツ　或る日　　イチニチ　終日
不便　フベン　便利ならず　　フビン　憐むべし
中間　チユウカン　その間　　チユウゲン　召仕の一種
地味　チミ　土地の味　　ヂミ　派手ならず
工夫　コウフ　工役する人　　クフウ　分別思慮
有爲　イウヰ　材幹あり　　ウヰ　有爲轉變
施行　シカウ　法律施行　　セギヤウ　物を施し與ふ

以上がそれだが、さうとも限らず漢音でも呉音でも次のは全く同意のものである。

書籍　シヨセキ　シヨジヤク　　圖畫　トグワ　ヅグワ
公卿　コウケイ　クギヤウ　　兄弟　ケイテイ　キヤウダイ
男女　ダンジヨ　ナンニヨ　　中食　チユウシヨク　チユウザキ

五　古今によりて讀方の變つたのもある

音信　インシン　　オンシン
萬歳　マンザイ　　バンザイ

擁護　オウゴ　ヨウゴ

帽子　モウス（易林本節用に）　バウシ

納涼　ダフリヤウ（同上）　ナフリヤウ

六　和語に存する音便法を漢語にもあてはめた者。

（イ）　クをなだらめてウと

北條　ホウデウ　綠衫　ロウサウ

格子　カウシ　冊子　サウシ

（ロ）　ンをなだらめてウと

判官　ハウグワン　綠衫　ロウサウ

三　サウ（人名に）　反古　ホウゴ

（ハ）　促める音又は撥ねる音を棄てる。

日本　ニ〇ホン　別當　ベ〇タウ

以上　ツ　を棄てる

南殿　ナ〇デン　本意　ホ〇イ

旋頭歌　セ〇ドウカ　冠者　クワ〇ジヤ

以上　ン　を棄てる

薬籠　ヤ〇ロウ　　驛家　ヤ〇ケ

看督長　カ〇ド〇ノヲサ　　樂府　ガ〇フ

國忌　コ〇キ　　國府　コ〇フ

以上　ク　を棄てる

（二）　二字の音を一字の如くに扱ふ。

右衛門　エモン　　少輔　セウ

史生　シヤウ　　按察使　アゼチ

以上の場合は共通した標準が存したか類例も多いが、以下は個々の場合である。

七　意義相通ずる時、一方の字若くは句の讀方を以て他の字若くは句の音とするもの

目(國)　志(兵衛・衛門府)　主典　サクワン(佐官)と讀む

尉(兵衛、衛門府)　掾　允　ジョウ(丞)と讀む

葱　ヒトモジ

韮　フタモジ　女房詞にて葱は一音、韮は二音なればこの語あるによりて直に葱・韮をもかく讀む。

蒜　ニンニク　忍辱の音、僧家の隱語

又意義相通ずるといふよりも、その動作によりて文字と變へたのに猶元のまゝに讀むものがある。

振舞　エンブ　弘仁内裏式に振舞とあるをその本名とし延舞・鹽夫などの字をも當てる。この舞は桙を振るから

その動作より振舞の字を用ひる。物徂徠の南留別志に「振舞をゑんぶとよむはふ°とゑ°と形似たるゆゑ讀み違へるなり」とあるはまことに窮した說明だ。

八　山田教授は

禮記に公與二交兄一齒とあるが如き場合に齒をヨハヒスと讀むことになつて居るが、こゝでは齒はヨハヒで無くて齒のやうに列る意で用ゐたもので同列の意である。

と述べられた。その尻馬に乘ると同じく禮記に、「夫子之病革矣」とある革は釋文にも「本、又亟に作りて居力反の急なり」とあればセマレリと讀むべきを普通にアラタマレリ（の音は古數切）とする。

論語に、「曾是以爲レ孝乎」とあるを段玉裁の說文注に「曾の言たる、乃なり。論語の曾是以爲孝乎、曾謂二泰山不一レ如二林放一乎、孟子の爾何曾比二予於管仲一は皆訓じて乃と爲すべきは趙（岐）が孟子を注して「何曾は猶、何ののことし」と曰へる是なり」と云へり。然るに普通にはカツテと讀む。

さてこれ等は一の意見で齒スの例とは不倫だとせられるならば、歷史で、「[illegible]天皇壽一百二十七歲」を壽と讀む。そも〳〵コトブキは言祝の意で漢書の莊入爲レ壽の注にも「爵を尊者に進めて無疆の壽を献ずること」とある時の讀方だ、今のは之を壽年の意に濫用して居ること齒すと同じ。

九　漢字に書けば同じきが、音と訓とにてその意義の頗る異なるものは枚擧に遑あらぬ。

一人　イヂジン　天子の御異稱　　戸口　ココウ　戸數と人口と
　　　イチニン　人ひとり　　　　　　　トグチ　門戸の出入すべき所

イチノヒト　攝政關白

間語　カンゴ　心開かな物語

アヒガタリ　能の前仕手（ゼンシテ）と後仕手（ゴシテ）との間に狂言師の出て語ること

上米　ジヤウマイ　上等の米

ウハマイ（ウハマヘ）　住吉神社にて年貢の米の中を幾分づゝ調進せしむる上分米（シヤウブンマイ）のこと。今はウハマイをハ

ネるの語も有り。

御形　ゴギヤウ　春の七艸の一種

オンカタチ

一〇　古來の慣習として一語の中の或る字を讀まぬがある。

大元帥法　タイゲンのホフ（帥を讀まず）　于蘭盆供　ウラボンク（供をよまず）

女王祿　ワウロク（女を讀まず）　施藥院使　ヤクヰンシ（施をよまず）

視告朔　コクサク（視をよまず）

逆に讀むのもある。

定考　カウジヤウ　稱唯　ヰシヨウ

千思翁　ヲウサイ　能の翁舞に出づる白髯の老翁の稱、ウサイオウなるを轉じて（大言海の說による）

特に音を延ばして讀むのもある。

女院・女御・女官　ニョウ（ニョにウを）　旨趣　シイシュ（旨をシイと）

夫婦　フウフ　夫をフゥと）　贔屓　ヒイキ（贔をヒイと）

或は音を捨てるものもある。

乞巧奠　キカウデン（キチのチを）

還昇　クワンジョ（この二はジョウのウを）

見證　ケンジョ

一一　樂曲の名には特殊の讀方がある。

壹越調　イチコツテウ　倭名抄龜貝部に蟛螖二音彭越とあり。螖は戸八切にてカツだから螖を越と讀むと越をコツと讀むとはその關係が同じいから樂曲にも限らぬか。嶺表錄異には「呉人が彭越と呼ぶは語の訛れるなり」と片附けてあると倭名抄の箋注に出て居る。

盤渉調　バンシキテウ　團亂旋　トランデン

一二　同一の字であり乍ら之を讀み分けるものがある。

正（シャウ）　位の等級に添ふる詞、但し神の位には淸みて讀み、人の位には濁りてジヤウと讀むを習ひとすと云（言海）

大將　中古はダイシャウ、現今はタイシヤウと淸む

博士　中古にはハカセ、現今はハクシと讀む

大夫　タイフと讀む時五位の通稱、ダイブは中宮職東宮職など職の長官の稱、又タイフは支那にて諸位の長臣をい

ふ假名

和尚　クワシヤウは天台宗にて・法相宗にてはワジヤウ、その他にてはヲシヤウと讀む。

一三　發音の混雜より、あらぬ假名遣となつたものがある。

入御（ジユ）　入輿　入水　入木道　入來　入牢

入はジフの音なればジユとすべき理は無い。ジフをジユウと發音してその末を切り捨てた音を寫す爲にこの假名遣となつたのだらう。その徑路を示す者に、

入魂　ジユツコンの語がある。

執行（シユギヤウ）　執もシフの假名

一四　漢土の古音の我に存するものがある。

宜ガ　奇カ　移ヤ　侈タ

意オ　已コ　里ロ

右の用法は推古期の古文に存するもので大矢博士が假名源流考で周代の古音だとせられたもの。而して周代と斷定せられたは、先秦の書に存する押韻と一致するといふのである。若し周代にのみ存した發音ならばこの論定は動かぬが、その發音が漢魏にも猶行はれたならば周代に系けるに限るまい。然るに、顧炎武の唐韻正によると宜移は史記の太史公自序に、奇は魏の何晏の景福殿賦にア段の音に用ひられて居る。漢土は尚古の風が盛だから、その當時の發音より離れて古い押韻に依つたと云へばそれ迄の事だが、さう云へば、周代のも夏殷のに依つたのかも知られぬ。但し

六朝二百六韻の立て方よりは古いから今古音といふに何の不都合も無い。

一五　偏又は傍によりて讀む百姓讀の最も古いは植物の名「桔梗」だらう。桔は古屑切だからケツの音であるに拾遺集の物名歌に「あだ人の眞垣近うな花植ゑて匂ひもあへず折り盡しけり」とありてマカキチカウに桔梗を寄せたからにはキチカウと讀んだこと著しい。

又三卷本伊呂波字類抄多部疊字に「地忍　タヘネムセム　上字湛」とあるは地の堪たるべきを示したので、この部に收めたはタヘ、ネンゼンの訓を用ひたのだ。然るに十卷本の同部には「堪忍」と出したは訓で收めたを音と考へたらしい。但し之によりてその當時堪と讀む傾の有つたは察せられる。今日でも「堪能」の場合には動もすれば「タンノウ」と讀む。

「防鴨河使」といふ官名ありてバウカシと讀む、鴨のアフがバに攝せられたのだ。然るに易林本節用集にはこの語の左にこの訓を、右に「バウカフガシ」の訓を附けた。バウカシを十分に理解しないで、鴨の音が缺けて居るとしてカフを加へたので、當時鴨を百姓讀でカフと考へたが知られる。又思ふに倭名抄の三河國の郡名に設樂志太良とある。この設も桔（韻鏡面にては結）と同じく韻鏡第二十三轉に在りて普通セツとのみ讀む字だから、古はこの轉にキチ・シチ（志太はシチの轉）の音があつたのかも知れぬ。すると中々、百姓讀の祖など輕蔑すべからずだ。

一六　全く由なき音で、而も古き節用集などに有るものがある。

匹　ヒキ　　乏　ボク

冊　サツ　　篳篥　ヒチリキ

一七　一語にして多様の讀方を有するものもある。

花瓶　(1)クワヘイ　一般の插花の瓶

(2)クヱビヤウ　佛壇の上卓におく小なる

(3)クワヒン　佛壇の前卓におく大なる

(4)クワビン　一般の挿花の瓶

吾が國では漢字に漢音呉音の二あるを常とする。故に二字から成る熟語はその組合せで四ツの音が生ずるけれども、都合よく熟語として何れも用ひられるものは少い。この場合でも

漢音　クワ―ヘイ　(1)

呉音　クヱ―ヒヤウ(2)

ともに漢音で讀み、呉音で讀んだのは熟語として認められて居るが、その各々を合せたの(クワヒヤウ・クヱヘイなど)は認められて居らぬのである。然るに獨り瓶の字に普通、唐音(といふがその實は宋元の語)と云はれるヒンがあり、その清濁兩音(唐音には二種無いのだからビンは連濁である)の熟語があるので四様の讀方を得るのである。

三　其の他について

以上漢字の形及び音に關して國語中に起つた特殊な事例を擧げた。次には義に及ぶべきだが、義は即ち之に當てた

國語(＝訓)である。今一々その國語の適否を詮議するは餘りに煩瑣な事であるばかりで無く、それは絶大の知識を以てしても猶失錯なきを得ぬ性質のものだ。伊藤東涯と云へば最も博洽な學者であるがその名物六帖器財箋扁傍書畫の部で、

牙籤（コハゼ）　西京雜記に「秘閣の圖書は皆表するに牙籤を以てす」韓退之の詩に「架に插む三萬軸一々牙籤を懸く」

と出された。その意は書物の帙で引き懸け置く普通角製の物を牙籤とせられたのである。然るに龜田鵬齋の侯一鯖覽(五卷　天保十二年の提要が有る)に

牙籤とは書簽なり。象牙にて造りて毎函に書名を題識して之を軸に施して尋案に便するもの、今紙を以て簽となすも此の類なり。

と之を正してあるでは無いか(大槻博士の言海に「こはぜ　書物ノ帙、卷物ノ紐、足袋脚半ノ端ナドニ着ケテ引懸ケ置クニ用ホル小キ鈎ノ如キモノ、象牙、角、眞鍮ナドニテ作ル　牙籤」とあるは侯鯖一覽を見遺されたものだ。大言海には正されたらう)。是は上手の手から水が漏るの喩の如く東涯先生に似合はぬ粗漏である。夫、東涯先生でさへ然りとすれば、いかに盲目（メクラ）者蛇に怯おずとは云へ、私などが漢字に當てた訓の是非を云々すべきで無い。

私は又思ふ。吾人の祖先がその字にその訓を當てたのゝ是非を判斷するには吾人の祖先が參考した材料が復吾人の前にも與へられねばならぬ。それ等の材料を知らずして是非を判斷しても必ずや吾人の祖先をして承服せしめ兼ねよう。然るに私の知る所では吾が國で云へば足利時代の後半の文教地を掃つた間に、貴い文献が喪はれ精當な傳說が歪められたこと夥しい爲に、吾人の祖先がその訓を採用するには確乎たる證左があつたに、その證左が今日は湮滅し

て吾人の前に持ち出されぬこと甚しい。今その一二を例しよう。

鯛　タヒ

說文に「骨の端脆きなり」とあるは論外

玉篇には魚名とあるのみで吾人の珍重するタヒの意を表さぬ。よりて漢文には棘鬣魚でなくてはならぬやうに云ふ人もある。然るに倭名抄にはこの鯛の字を崔禹の食經を引いて、「味甘冷にして毒なく貌、鯽(チヌ)に似て紅き鰭(ヒレ)（堅き鱗）の者なり」（堅鱗の二字、醫心方の引文によりて補ふ）と說明してある。鯽に似、堅鱗・紅鰭ならば吾人の珍重するタヒに相違ないが、崔禹の食經は今日傳本なくして毎に證左としては持出されぬ。この引文なき限は棘鬣魚でなくてはならぬといふ人に勝目がある。

村　ムラ

市・町・村、あまりに有り觸れた文字を此に持出したら、私の常識を疑はるゝ人もあらう。然るにこの字の解たる、字書には宋本玉篇に「聚坊なり」廣韻には「墅なり」集韻、類篇に「援なり、聚なり」とあるのみで、吾が國の用法とピッタリと來ぬ。而も陶淵明の詩に・「曖々トシテ遠シ二人村一」とあつたり、その文に「村中に民人有りと聞きて、みな來りて問訊す。」と見えたりするは吾が用法と餘程近い。かうなると大岡越前守も一寸取捨に迷はう。然るにこゝに屈竟な證左が提供せられた。吾が中算の法華經釋文に、「玉篇に村とは聚落にて人の聚り居る所なり（以上二ともに、もと漢文）」と引いて居る事是である。

嵐　アラシ

説文に「嵜嵐は山名」とあるは論外。廣韻に「山氣なり」とあるは吾がモヤ。故に王維の詩に「夕陽彩翠忽成（チ）レ嵐（ト）」と見え、瀟湘八景では「山市晴嵐」と數へる。吾が近江八景の「堅田晴嵐」にしても堅田の浮御堂のあたりのモヤにボカされた景をいふのでアラシでは無い。

文屋康秀が「うべ山風を嵐といふらん」と詠んだは文字の上にいふ滑稽に過ぎぬのだらうか。否、文選の注には「埤蒼（古い字書）に山の風なり」慧琳の一切經音義には「古今正字（古い字書に）に山の風なり」倭名抄には「孫愐（切韻といふ字書の著者）云ふ、嵐とは山下より出づる風なり」と引いて居るから、吾が國で荒風（アラシ）にこの字を當てるは唐以前の雅語である。康秀も嵐の字が山風に分れる上に山の風といふ解もある所を面白く取成したから、その作歌は多くも傳はらぬにこの歌の千古に膾炙せられるのであらう。

かゝるものを現存の字書によりてのみ審判するの當らぬは餘りに明白だ。よりて以下は義についてといふよりも雜の部ぐらゐの所で進まう。

一　吾が國獨特の用法をなすもの。

尊・命　ともにミコト

日本書紀に至貴曰レ尊、自餘曰レ命とある。蓋し對稱の尊稱にミコトといふ語がある。そのミコトは御言（ミコト）を以て寫される所から命の字を用ひたと見えるが、尊に至っては意譯とでも云ふべきか。

壺　梨壺・藤壺

漢字で宮壺といふに近い。言海には坪の意に壺を借書すとある。その坪にしても漢字では地平（ノ）處（ナル）とあるのみだ。

二　女房詞にて葱を一ト文字、韮を二タ文字といふは、その音を示す文字の數を云ふので正しいが、さてその他の場合はいかに、

酢（スシ）　スモジ　　憚（ハバカリ）ながら　おハモジさまなれど
其方（ソナタ）　ソモジ
母（カカ）　髢　カモジ　　莖漬（クキヅケ）　クモジ

ス文字・ソ文字より始まる語といふ義なら餘りに尻切りの語である。

三　和語を意譯して漢語を當てたに、その漢語をなほ和語に讀むもの。

しかのみならず　加之

さすが　流石

晉の孫楚、漱キレ流ニ枕スト石ニといふべきを誤りて漱レ石枕レ流と云つたが、直に漱石は齒ヲ磨クナリ、枕流は耳ヲ洗フ（堯の時代の許由の故事）ナリと說明したはさすがに善く牽強（コジツ）けたとて流石の二字を用ひるといふ說に據つて今、出したが、然らば石流の方が適切だらう。

ちよと　一寸

ひたすら　只管　宋史に不レ養ニ健兒ヲ蓄ニ乞兒ヲ不レ管ニ活人ヲ只管ニ死尸ヲとありて、始は副詞と動詞であつたが、

朱子語錄には只管恁ニ人說リテ不レ得と全く副詞に用ひた。

さもあらばあれ　遮莫　上杉謙信の霜滿軍營の詩に用ひてある爲に吾が國では普通に知られて居るが、婁茄雖貴に

も「遮莫は俚語、猶、儘教と言ふがごとし」とあつて儘教の形が正しいのだ。儘教は普通に

儘教(ママシム)飛舞(シテ)出(デ)宮墻(ヲ)　儘教(ママシム)無(トモ)酒不(カラ)須(ヒ)賒(ノ)

と呼んで副詞と動詞とに分けた書物もある。因にいふがこの儘は盡の俗字とせられるので、盡が任す、縦令(タトヒ)の意となつた時にこの形を用ひる慣例だ。盡に儘があるは動に働が出來たと似て居る（働は康煕字典の本文は勿論、補遺にも備考にも收めぬ。）

四　國語に漢字を當てゝ、その漢字によりて語源を說けるものがある。

右流左死(ウルサシ)　云事は昔兄弟左右の大臣在りけるを相人見て立樣にウルサシと云ひけり。その後弟の右大臣、兄の左大臣を殺して弟右大臣流に云々伊勢物語在之（世俗字類抄）

右大臣道眞公は流罪となり左大臣時平公は都に止まれるを世人嘆きて「右流左止と云へり」ともあつたやうだが、今その出典を思ひ浮べぬ。

伊勢　人の平かに（伊の卿躰）生るゝは丸(マロ)が力（勢の卿躰）なりと天照太神の宣ひしによりて伊勢の國名は起れり」といふ說明ありと先師日置先生に聞きたれど未だその出典に接しない。

胡馬(ウマ)　日本の人、馬の字を呼びて胡馬と曰ふはその理無きに似たるか。馬多く北胡より出づる故に胡馬と曰ふなり。句に曰はく胡馬嘶北風越鳥巢南枝と（下學集）

五　漢語にあらぬ當字(アテ)をして、それによりて語源を說いたもの。

魚道(ギヨダウ)　酒杯のシタミ、杯の底の沈み殘りをこぼすこと。凝當の借字（大言海）

殘盃を建す器なり、舊瀝を以て杯盞を洗ふを魚の舊道を過ぐるに喩ふるが故に魚道といふなり。魚は大海に游泳すと雖も舊道を忘れざる者なり（下學集）

烏亂（ウロン）　支那の俗語なり、ミダリナルこと。胡亂（大言海）

烏亂は彷に義を平沙落雁に取れるか、落雁は亂雜の義なり（下學集）愼吾按ずるに雁を直に烏と云はんは鹿を馬といふに近し。

折檻　セツカン　罪を懲さんと責めさいなむ意を後漢の朱雲が切諫して檻を折つた故事にて表すものとして餘り世人も怪まぬが、私は三矢博士の「この字、朱雲の故事より出づといふは如何あらん。責勘などが却つて當れるにあらじか。切勘とも書きたれば切諫の字もあるべく思はる。諫の字イサムと訓じて、國語には上より下に對するにも用うるなり」とあるに心引かれる。

誤解せられたまゝで用ひられて居るもの。

六

三平二滿　オタフク（お多福）

黄山谷の詩序に「四休居士笑つて曰く

粗茶淡飯飽即休　補破遮寒暖即休

三平二滿過即休　不貪不妬老即休

と。山谷曰く此安樂の法なり、欲少きは不伐の家なり、足るを知るは極樂の國なりと」とあるもので、平と滿とは曆の中段の語。滿は五穀財物を取入れ、婚姻・新築・種蒔に吉、平は萬事に用ひて吉なれど但種蒔に凶。

さて滿と平とは相續くから二日が滿なれば三日は平で即ち三平二滿。蓋し俗間では平滿の日が回り來ると吉事あれかしと心ときめきするが、四休居士はその過ぐるに任せて一向無關心で過すといふ意。然るに今やお多福の面相でも描寫したかに用ひ來つた。

七 漢字にあてた訓について一笑話がある。泊をトマル、晒をサラスと訓ずるは入り違つたので、泊をサラス、晒をトマルとあるべきだ。そもそもサラスとは水で洗ひ濯いで汚れたるをも白くするのだから水に從ひ白に從ふ字が之に當り、旅人のトマルは日西方に暮れて夜に入るからだから日に從ひ西に從ふ字が之に當る。今の如く泊にトマル、晒にサラスでは何の意味の連絡があるかと云ふので眞に面白い思ひ附である。但し晒は曬の俗字だから康煕字典にも本篇には收めて居らぬ位。サラスには洒が本字であるが、この文字學者に云はせたら晝寢から起きて洗濯したからサラス頃には日が西に傾いたので水に從ひ西に從ふのだと云ふだらう。又音讀するのでは豆腐と納豆とは入り違つた、納豆こそ豆を腐敗せしめたものであり、豆腐こそ長方形の型にヲサメて成つたのであると云つた說もある。この文字學者、納はヲサメルでも上納收納で、型にヲサメルで無いことを忘れたと見える。

八 私の知見では解せられぬが、由ありげに見えるものを次に二つあげる。

日本書紀の仁德四十年紀に「重二皇后之言一亦敦二干支(コノカミオトト)之義一」、雄略二十三年紀に「今星川王心懷二悖惡一行闕二友于一」舒明卽位前紀に「吾知二汝言之非一以二干支之義一不ㇾ得ㇾ害」と「干支」が三度まで出て居る。蓋し兄弟の義らしいが今日普通にはその出典が分らぬ。雄略紀のは友于に改めて見る說もあるが他の二處にはあてはまらぬ。

同書の垂仁四年紀に「皇后於ㇾ此心裏戰兢、不ㇾ知ㇾ所ㇾ如」景行十八年紀に「島中無ㇾ水、不ㇾ知ㇾ所ㇾ爲」、欽明卽位前紀

に「[illegible]者、不ㇾ知ㇾ所ㇾ知」、孝徳の白雉八年紀に「消勿（人名）等皆散不ㇾ知ㇾ所ㇾ如」のやうに「不ㇾ知ㇾ所ㇾ知」と「不ㇾ知ㇾ所ㇾ爲」といふのがある。これは「不ㇾ知ㇾ所ㇾ爲」らしいがその形は別にあるし、筆誤と見るには三度までである。楚詞に「迷不ㇾ知二吾之所一ㇾ如（注に如之也）」とあるが、これではピッタリ來ない。この類は　輕率な斷定を下すべきで無い。

九　彼土に存した古義の即でわが國に傳はれるもの。

般　ツヽミ

萬葉集に婆介池般とあるは史記孝武紀の鴻漸于般の注に漢書音義の水涯堆也と引いたのと合ふが、經籍纂詁にも史記以外の用例を出さぬ。

永　カハ

萬葉集に山可良思、永可良志と對言して居るのでカハたるべきは明白だ。說文に永の字を水長也象二水巠理之長一とあるにカハの義でナガシこれに轉じたものだ。

言　ワレ

萬葉集に雁者言穗、欽明紀に言念下先祖與二百早岐一和親上之詞、靈異記訓釋に言和禮などあるは爾雅の言我也である。

是　ウヂ

同じく萬葉集に是川瀨などあるは儀禮注に古文是爲ㇾ氏と合ふ。

能　クマ

萬葉集に熊野(クマノ)舟附(フネハテ)とあり。説文に能、熊屬(ハノナリ)云々とあり。

最後には日本書紀履仲六年紀に「王體不レ念水土不レ調」上宮法王帝説に「上宮法王枕レ病弗レ念ニ于食一」とある「不念」、「弗念」である。これ等は今日用ひる不豫で、今本周書金縢に有レ疾弗レ豫とあるのを許愼の説文には周書曰有疾不念と引いて居る。卽ち許氏の見た尙書には弗豫を不念とあつたので、書紀の作者もその字面を用ひられたのだ。この説文の用例を知らぬ爲だらうか帝説にはユ、ロヨカラズと讀み又はヨロコビタマハズと讀みたれど、タノシビタマハズが當らう。特に或る人の「晩食は念(ココロヨ)く聞食さゞりけれども朝餐は常の如くなりしさまに聞ゆ」と解する如きは弗豫の字義に達せぬとも云へよう。

一〇　國語にあてた漢語が堂々として漢土の字書に收められたもの。

寺子屋　日本の德川時代に文敎は僧侶に掌られし時その子弟を集めて寺院にて敎へたる者、その後漸く推して漸く廣まりて全國に徧く中等以下の子弟は皆こゝに就學す。敎科は習字を以て主となし讀書・算術・裁縫・信札等は欲する所に隨ひて之を授く。普通敎育に於て頗る功有りしが明治の初、學制發布の後に始めて廢す(辭源)

心得　日本人、章程規則に於て往々心得と曰ふ、生徒心得の如きは猶、生徒須知と言ふがごときの類なり。日本にては權時(暫時のこと)事務を經理する人を謂ひて心得と曰ふ。局長心得、校長心得の如きは卽ち權理局長・權理校長なり。(同上)

一一　山田敎授は官職に唐名(カラナ)を用ひたを述べられた後に

其の人を重ずる心持を表す方法として、其の人の名を音讀することも行はれた。藤原時平を芝居でシヘイ公といふのが其で有る。

その他小野道風をタウフウと云ひ、源頼光をライクワウと云ひ、藤原定家家隆をテイカ、カリウと並び稱したなども皆この心持で有つた。

とも指摘せられた。唐名を用ひたり音讀をよしとするは畢竟漢文の形を重ずる心理の發露だらうがそれをここに附記しよう。今日政府の辭令で本官の時は漢文に書き、待遇官のは假名交り文に書き下すことになつて居る。昭和八年四月一日の官報で例するならば、

第一高等學校教授從五位　氏　名
任東京帝國大學助教授　叙高等官三等

公立大學助教授從五位　氏　名
公立大學教授ニ任ス　高等官三等ヲ以テ待遇セラル

彼の漢文の形の雅びな某氏も任東京文理科大學教授の辭令書には會心の笑を禁じ得なかつたらう。

前條のわが祖先の心掛は責めるべきで無い方面だが、今度は大に見上げたものを出さう。桓武天皇が延暦十二年(一四五三)新に平安京を經營せられると幾多の門がならび立ちて輪奐の美を呈した。その諸門の中に、

應天門　(洛陽宮城の)
朱雀門　(長安城南門の)
羅城門　(唐の京城門の)

の如く彼の土の名を襲用せられたものもあるが、左の十一門には別の傳がある。このあたりの紀事は正史が缺けて居る爲にいかばかりの信を措くべきかも問題だらうが、事實は確に之を證する。卽ちその建築に任じた氏の名を傳ふるべく門名が撰定せられたといふので、拾芥抄にはその建築に任じたものを

造殷富門伊福部氏也
造安嘉門海犬甘氏也
造藻壁門佐伯氏也
造陽明門若犬甘氏也　或書云 山氏造之
造談天門玉手氏也

造美福門壬生氏也
造偉鑒門猪使(ヰカヒ)氏也
造待賢門山氏也　或書云 建部氏造之
造達智門丹治氏也
造郁芳門達部氏也　或書云 的(イクハ)氏造之

と記して居る。今、門名とこの氏の名とを比較すると（或書を出した三門はそれを用ひる）

殷富	インフ	伊福部	イフクベ	美福	ミフク	壬生	ミブ
安嘉	アヌカ	海犬養	アマイヌカヒ	偉鑒	ヰカム	猪使	ヰカヒ
藻壁	サウヘキ	佐伯	サヘキ	待賢	タイケヌ	建部	タケルベ
陽明	ヤウメイ	山	ヤマ	達智	ダフイ	丹治	タヂヒ
談天	タムテン	玉手	タマテ	郁芳	イクハウ	的	イクハ

のやうな共通を見て決して偶然の結果で無い事が分る。
漢土では夙に夫役(ブヤク)は國民の義務となりてわが國の如く氏族で奉仕する場合が無かつたからかも知らぬが、この種の命名は私の寡聞なる未だ之を耳にせぬ。

〔二〕　山田教授は

又漢語は名詞、副詞の外に又用言として用ゐらるゝことが有る、其には其に語尾を加へてするので

　　四角い　怪し　凛々し

のやうに形容詞にしたもの

　　裝束きて　目論む　意地める

のやうなもの

　　上手めく　下司ばる　氣色だつ

のやうなものが有るが、現今盛に用ゐらるゝ者はスにつけて動詞とすることで今の動詞の約半數に近い量になると思はる

とも述べられ、又「漢文訓讀の爲に生じた新たな語法及び慣例が有る」とて

所、間といふ關係代名詞をばトコロ、アヒダと讀んで一種特別の語遣を生じたこと

未をイマダ、ズと二語に讀んで一意をなし、須をスベクアラクとベシとの二語に讀んで一意をなすもの

並、及は元來國語の助詞トにあてて十分なのに之を直譯してナラビニ、オヨビといふ接續詞のやうなものを作つたりした事

漢語の形で有り乍ら（前文に「國語に入つた漢語の大多數が體言ことに名詞として取扱はるゝもので有る」とも有る）用言的の性質を著しく表して居るもの、存すること、例へば「平將門を追討の賞にて」の追討といふ語は動詞としての形は更に表して居ないが「平將門を」といふ補格を伴ひ、其を處分する意は十分で有る。

など詳かに示された。この所、間の如き記錄文から書翰文に移つたものゝ用法については先師の遺著たる武藤元信論文集の「記錄文の特色」にも

　之　間　由　旨　趣　條　儀　以　於　所　處　者（テヘレバ）　者（ハヌバ）　訖　欲　上　刻　件　存　致　觸　及　罷　相　申

の二十七語について述べられてある。この論文集は廣く發賣したもので無い爲に一般の讀者には注意せられぬかと思ふからこの機會に吹聽するも弟子の私心とな思しそだ。さて私はこゝに漢文の形にひかれて國語としては純粹らぬな語法の生じたものゝ一二を擧げたい。

イ　孝弟也者　孝弟ナル者ハ

也者をハと讀むのみにて足れり。

ロ　其然豈其然　其然リ豈其然ランヤ

其然りと諸ふのでは無い。其然ランヤと重ねて讀むべきだ。

ハ　手可ニ以執一足可ニ以行一　手以テ執ルベク足ハ以テ行クベシ

この以テは讀むべからず。私は嘗て下の如き場合を目撃した。この形を中學生に敎へると、中學生は以テ執ルを持チテ執ルと理會したと見えて、之を承知したが以テ行クを承知せぬ。敎師はそれと氣付かぬ故に兩以テが同じだと力說するが、生徒は足に以テが不都合だと主張する。長い問答の末にやうやう生徒の意中が分つたといふは以ての外の事だつた。須らく讀むべからずだ。

ニ　爲人所殺　人ノ殺ス所ト爲ル

漢文にて「爲」の字が「なす、なる」の意義の時は平聲だのに、この場合は去聲に讀むことゝなつて居る、去聲は緣也、被也の意義だから殺ス所トナルと讀むべきで無い。又「人ノタメニ殺サル」と讀むと去聲の意にはなるが、國語では「第三者の爲に己が命を捐てた」ことにもなる（對手に殺されたでは無く）虞が有る。是は「人ニ殺サル」と讀むが唯一つの正しきもの。史記に「所殺者白帝之子、殺者赤帝之子」とあるを「殺ス所ハ白帝ノ子」と讀まば白帝之子は場所の名となるでは無いか。

ホ　氷炭不啻　氷炭タヾナラズ

氷炭は尋常デナイ、氷モ炭モ無代價デハナイの意の外には解せられず云々、不啻は熟語にして二字にて何ゾ止マ

みの意を成す云々、已むことを得ずは「氷炭不啻ナリ」と讀みて有るべきなり（廣日本文典別記の意を採りて）

へ　帝國議會ハ　月　日ヲ以テ之ヲ開會ス

、月、日帝國議會ヲ開會スといふが純粹な云方だ。

以上はほんの一二例に過ぎず、しかもこれは實は重大なる問題だが、これを以て筆を止め、「漢語と國語」を擱筆する。

國語科學講座
（第一回配本）

昭和八年五月二十日印刷
昭和八年五月二十五日發行

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院